

「私は」と「私」による発話解釈への影響

著者	浅津 嘉之
雑誌名	日本語教育論集
号	21
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00026982

1. はじめに

本稿は、無助詞研究の一環として、文の主題である「私は」と「私φ」に注目し、それらを聞き手の発話解釈の観点から考察する⁽²⁾⁽³⁾。両者には共通機能として、聞き手へ文の主題を明示することで発話解釈の手助けを行っていることを、相違機能として、それぞれ対比対象を想定した解釈と、対比対象を想定しない解釈を行うよう聞き手を導いていることを主張する。

2. 先行研究

本節では、これまでの無助詞研究の中から、話し手に考察視点を置いたものをまとめる⁽⁴⁾。長谷川(1993)は、無助詞は「伝達したいことがらを聞き手によりの確に把握してもらうための手段」であるとし、無助詞独自の機能として「取りだし」を提示している。その機能とは「話し手が聞き手に伝えたいことの基盤になるようなことを取り出して指し示すこと」とされている。「取りだし」の積極的機能として、「聞き手の注意を喚起して合図するためにキューとなるものを取り出す」「信号性」を、消極的機能として、「対比性や排他性を不問にして中立的に取り出す」「やわらげ」を挙げている⁽⁵⁾。「信号性」は聞き手の注意を喚起したり、話し手の感情などを表出したりする表現(1)に、「やわらげ」は依頼や勧誘といった聞き手の意向を重視する表現(2)に使われるとする⁽⁶⁾。

(1) 電気φ、アブないからー / 私φ、がっかりしちゃったわ。

(2) コーヒーφ (ヲ? / ハ?)、飲みます? / (電話をかけようと思い 10 円玉を借りようとして) こまかいのφ (ガ? / ハ?)、ある?

長谷川は、「取りだし」という話し手の行為に注目することで、無助詞の使用を考察したものである。

楠本(2002)は、日本語教育への応用も考慮し、話し手が無助詞文⁽⁷⁾を生成・使用する過程を考察している。無助詞文成立の環境条件として、特定の語り先が物理的・心理的に身近に存在すること、内容条件として、その話題が話し手や聞き手と現実的・直接的関わりを持つことを挙げ、次のように分類している。

話し手が会話場面や人間関係を意識した場合、フォーマリティーや丁寧さが低いほど無助詞文が使用される。また、話し手が自分の気持ちをわかってもらうよう聞き手に働きかける場合も、その働きかけが強いほど無助詞文が使用される。その働きかけの種類として、話し手が聞き手に相互の心情理解を求めるタイプ(3)、勧めや要求といった受益的効果を求めるタイプ(4)、強い働きかけはないが何かの事情や状況を説明したり究明したりすることを求めるタイプ(5)の3つがある。

- (3) お仕事φ大変そうね。 / 僕φさびしい。
(4) ケーキφ食べる? / 辞書φありますか?
(5) (来訪予定の) お客さんφ来てるよ。 / 私φ田中と申します。

楠本は、話し手による会話場面へのかかわり方や聞き手への働きかけをもとに、話し手の情意面に注目することで、無助詞文が生成される過程を考察したものである。以上、話し手の視点から無助詞を考察した研究をまとめた。

3. 問題提起・考察対象⁽⁸⁾

会話とは、情報の発信元である話し手と、その受け手である聞き手による情報の相互伝達的な行為であると考えられる。そこには、メッセージを伝えようとする話し手の意図や、言語外も含めた文脈情報を手がかりにその意図を理解しようとする聞き手の解釈が存在する。しかし、無助詞に関する研究において、管見の限り、聞き手の視点に立ちその解釈の過程を分析したものは見当たらない。前述の長谷川と楠本が指摘するように、無助詞が、話し手が聞き手に対して注意喚起や心情理解といった何らかの「働きかけ」を行う場合に使用されるのであれば、そのような「働きかけ」を受けて聞き手の中でどのような解釈が行われるのかを分析することも、無助詞機能の解明に必要であると考えられる。

また、日本語教育の教科書では、無助詞を学習項目として取り上げているものが見当たらない。日本語教育の初級段階では、話し手の思考や意志、経験などについての表現を教えることが多い。そのため、日本語母語話者が自分自身について語ろうとする時の無助詞の使われ方や、無助詞による発話の場への効果について解明する必要があると考える⁽⁹⁾。

本稿は以上の2点を踏まえ、聞き手の発話解釈の観点から、一人称が主題となる文における「私は」と「私φ」に焦点を当て分析を行う⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾。さらに、これまでの研究には作例や小説、ドラマのシナリオなどを分析資料としたものが多く見られるが、本稿では日本語母語話者同士の会話を文字化した資料を使用する⁽¹²⁾。

4. 「私は/φ」の共通機能

本節では、「私は/φ」の共通機能について見る。共通機能とは、「これから自分(話者)に関する情報を伝える」と聞き手に文の主題を明示することで発話解釈の手助けをするものである。したがって、「私は/φ」がない場合、文内容が聞き手に正確に伝わらない可能性がある。以下、用例より、「私は/φ」の有無が主題の明確さに影響し、聞き手の発話解釈にも影響を与えていることを見る⁽¹³⁾。

(6)

M08: なんか、「人名 11」ちゃんにも悪いかなーって気がくすんだよ<{>。

M07: <あー>{>、確かにね。そりゃ、向こう、向こう、お互い知ってればね、てか、おれφ、「人名 12」とかも、まー、知らないわけじゃなかったじゃん。で、「人名 13」も知らないわけじゃないじゃん<軽く笑う>。

(7) 卒論作成の話をしている。

JF12: 殆どみんないえ、いえ、おうちにこもってた人がいたよ、冬とか、夏とか。

JF11: あ、私φ、夏こもったからな。

JF12: そうそうそうそう=。'=いつこもるなのよね。いいよ、私は、なんか、本を読んだりして…。

(6) では、「おれφ」がなければ、「知らないわけじゃなかった」のは、「人名 12」なのか話者自身なのかがはっきりとしない。(7) では、「私は」がなければ「本を読んだ」のが誰なのかがはっきりとしない。このように、「私は/φ」の有無は主題の明確さに影響を与えている。文内容の主題が明確でないということは、聞き手にとって発話の解釈に労力を要するということである。「私は/φ」は、聞き手の発話解釈の処理コスト軽減のために機能していると考えられる。

また、このことから、文脈から文内容の主題が想定できれば「私は/φ」は省略が可能であることが考えられる。しかし、「私は/φ」の有無により唐突さを感じられるものがある。用例を見る。

(8)

UF01: 語学研修とか行かれたことあります?=。

UF02: '=いや、ないです。

UF01: あたしφ、2年の、9月ぐらいに、3週間行ったんですよ。

(9) IF24 は将来仕事で独立を考えている。

IF23: 今はね、独立もしやすくなった時代だし。

IF24: うん、そうだね。

IF23: いんじゃない?、うん。あたしは逆に、独立とか、全然考えてないいな。

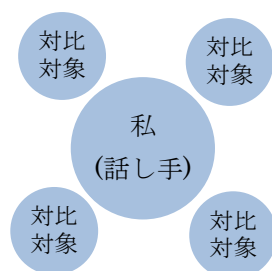
(8) と (9) は、主題が話者自身であることはその内容から理解できるが、「私は/φ」がなければ、突然話者自身について話し始めている印象を受け、唐突さを感じる。「私は/φ」が、「これから自分(話者)に関する情報を伝える」と聞き手に発話解釈の方向を先立って示している。その結果、唐突さの発生を回避していると考えられる。そのため、主題を他者から話者自身に移す場合は、「私は/φ」の必要性が高くなると言える。以上、用例より、「私は/φ」が共通機能として、「これから自分(話し手)に関する情報を伝える」と聞き手に示すことで、聞き手の発話解釈の処理コスト軽減を行っていることを確認した。

5. 「私は」の機能

本節では、「私は」の機能について見る。「私は」は、前節で述べた機能に加え、聞き手に対比対象を、文脈情報をもとに想定させる機能を持つ。聞き手は、「私は」を受けて、図1のような構図をイメージし、文脈情報を参考に対比対象を想定しながら話

し手の発話を解釈していく。

図1 「私は」により聞き手の中でイメージされる構図



具体的な対比対象の想定には容易なものから困難なものまでである。容易な場合として、対比対象が発話内で明示されている場合と、明示されていなくとも文脈情報から想定し易い場合がある。これらは他者と対比する意図が明確に感じられる。用例を見る。(用例(9)も参照)

(10) 以前友人と雷門へ行った時の話をしている。

F18: <なんやろ>{>}、なんか修理とかで(うん、うん)、はずされとってー、なんか、あたしーはー、なんか前も行ったことあるからー、“まいつか”って感じやってんけど、なんか、友達は怒った。

(9) は、対比対象は発話内で明示されていないが、話し手が聞き手の発言を受けそれとは逆の考えを述べていることから、対比対象が聞き手であることは想定しやすい。(10) は“まいつか”って感じ”た「あたし」に対し、「怒った」「友達」が対比対象として発話内で明示されている。

一方、はっきりとした対比対象を想定しにくい場合がある。しかし、想定しにくくとも、図1のようにその存在が「私は」により暗示されているため、話し手が自身と他者とを区別し、意見を主張しているように感じられる。用例を見る。

(11) 論文指導の場面で、JTM01 が論文の投稿についてアドバイスしている。

JSF01: 投稿<するかしないかということですか>{<}。

JTM01: <はい、はい、制度に頼らない>{>}。

JSF01: あ。

JTM01: 僕はあの一、えと、二つの意味から投稿する##と思いますけど=。

(12) M11 は自衛隊に就職を考えており、自衛隊への持論を述べている。

M12: うーん、確かになんかねー、古くて堅いようなイメージはある。

M11: おれは変えるね、それを。

おそらく、(11) では他の教師を、(12) では他の自衛隊入隊希望者を対比対象として

いると考えられる。これらは(9)(10)と比べるとはっきりとした対比対象が想定しにくい。しかし、「私は」の機能により、聞き手には何らかの対比対象の存在が暗示されているため、話し手が自身と他者を区別し意見を主張しているように感じられる。

注意することは、このような対比的な解釈は、すべて「私は」により導かれるものではないということである。(9)～(12)では、「私は」がなくとも、文内容から対比的な意味を読み取ることが可能であることから、「私は」は聞き手に対比的な解釈をさせる一つの要素にすぎないと考えられる。

ただし、対比的な意味を強調する場合は「私は」の必要性は高くなる。(9)～(12)では「私は」が明示されている方が、対比がより強く感じられる。「私は」は対比的な意味の強弱に影響を与えていると考えられる。また、対比的な意味を持つ発話には、後述の「私φ」も使用可能であるが、「私は」の方がその機能ゆえに、「私φ」よりも適していると考えられる。以上、用例より、「私は」が聞き手の発話解釈の手助けに加え、対比対象を想定し発話解釈を行うよう聞き手を導く機能を持つことを確認した。

6. 「私φ」の機能

本節では、「私φ」の機能について見る。「私φ」は、4節で述べた機能に加え、聞き手に対比対象を想定させず、話し手に焦点を当てさせる機能を持つ。聞き手は、「私φ」を受けて、図1の中の対比対象を除いた構図をイメージし、話し手だけに注目しながらその発話を解釈していく。

対比対象を想定する必要がない分、聞き手は話し手に意識を集中できる。これは聞き手を話し手に引きつけることにつながり、話し手が聞き手に訴えかけるような発話姿勢が生まれる。そのため、聞き手には容易に知り得ない、話し手の個人情報や心の内を打ち明けるような発話では「私φ」が使用される。用例を見る。

(13)

UF05: 今年の夏ってどっか旅行行きますか?。

UF06: あ、あたしφ、あの、来週の月曜日から実は留学に行くことになってくー

(14) お互いの印象について話している。

M14: でも一、でもね、1つはあんだよ。=あの「人名2」と一緒に何かやってるときに(うん)、おれφ結構ついていけないって思うときがあるんだよね。

(13)では話し手の個人情報を、(14)では話し手が以前から思っていた印象を、聞き手に告白している発話である。特に(13)では、真相や秘密などを開示する際に使われる「実は」や、背後の事情を伝える「のだ」と共起しており⁽¹⁴⁾、その発話が実情を告白しているものであることがわかる。

「私は」の場合、図1のように対比対象が生じるため、聞き手は話し手以外についても意識せねばならず、その分、話し手に注目することができない。そのため、対比的な解釈が生じたりすることで、話し手が訴えかけるような発話姿勢が薄れてしまう。

以下のタイプの発話では、対比対象が聞き手にとって想定できない限り「私φ」で

なければ不自然になる。(用例(6)も参照)

(15) 教育実習をした時のことを話している。

M01: /少し間/おれφ、そ、もっかい'もう一回'教育実習行きて一なー。

(16) 自分の名字について話している。

IF11: あー、そうなんだー。[小声で]ふーん。「人名3姓」さん…。「IF12姓」さんと。

IF12: そう。あたしφ「IF12姓」嫌い。

(17)

UF17: え、絵画とかやってる人って誰ですか?。

UF18: それは「人名4姓」先生。

UF17: あたしφ見たことあったかな。

(18)

F06: 私φ、この前さー、Tシャツにジーンズで朝起きたらいたっていったじゃん

(15)～(17)は、感情や疑問といった話し手以外には知り難い話し手の内側で起こる心の動きや思考を表した発話である。そのため、対比するのであれば、他者のそうした心理状態⁽¹⁵⁾を理解していなければならない。したがって、話し手が他者の心理状態を理解し、聞き手が対比対象を想定できるような、対比を表わすことができる状況でない限り「私φ」以外は適さない。

ただし、聞き手が前文脈ですでに意見を表明している場合、または文脈から聞き手の意見が想定できる場合であれば、「私は」が使用可能となる。例えば(16)では、前文脈でIF11が「IF12姓」が好きであると表明していれば「私は」の許容度は上がる。

(6)と(18)は確認要求と呼ばれる発話である。一人称が主題となる確認要求とは、聞き手も知っている話し手が判断する話し手に関する情報について、聞き手に問いかけて再度思い起こさせることにより、両者の間で共通の認識を持つことを目的とした発話である⁽¹⁶⁾。聞き手に思い起こさせるのは話し手に関する情報であるため、話し手のみに注目させる機能を持つ「私φ」が適している。「私は」の場合、対比対象を想定しながら旧情報を思い起こすものとなる。したがって、対比を表わすことも目的とした確認要求の発話でない限り「私は」は適さない。以上、用例より、「私φ」が聞き手の発話解釈の手助けに加え、対比対象を想定せず話し手のみに注目し発話解釈を行うよう聞き手を導く機能を持つことを確認した。

7. まとめ

本稿は、無助詞研究の一環として、3節で述べた問題意識から、「私は」と「私φ」に焦点を当て、それらの機能を聞き手の発話解釈の観点から考察した。主張をまとめると次のようになる。

	共通機能	相違機能
私は	「これから自分（話し手）に関する情報を伝える」と聞き手に示すことで、聞き手の発話解釈の処理コスト軽減を行う	聞き手を、対比対象を想定し、発話解釈を行うよう導く
私φ		聞き手を、対比対象を想定せず、話し手のみに注目し、発話解釈を行うよう導く

本稿の評価点は、先行研究では行われなかった「聞き手」という新しい視点から無助詞を分析したところにある。しかし、その結果は、これまでの無助詞研究による見解から考えられる範囲にとどまるものであり、本稿によって新たな説を示せたとは言い難い。今後の課題は、考察視点や観察範囲を再検証することで、無助詞現象を「聞き手の発話解釈」という視点から分析することの有意性や、無助詞が聞き手に与える作用について、より分析を深めていくことである。

<注>

- (1) 本稿は浅津（2008）を、考察視点の変更などを行い発展させたものである。
- (2) 本稿では無助詞を「φ」と表記する。先行研究でも「φ」が使用されており、引用例文中の「φ」は原文のままのものである。
- (3) 本稿での「文」とは、西山（1999）の「文トークン」である。「発話」もこれに含まれる。
- (4) 他の視点からの分析として、無助詞が付く名詞句や情報の流れに着目した大谷（1995）、文の情報構造に着目した加藤（2003）などがある。無助詞に関する先行研究は、加藤（2003）や佐藤（2009）に詳しくまとめている。
- (5) ここまでの引用部分は、全て長谷川（1993:162-166）からのものである。
- (6) 用例（1）～（5）は、長谷川と楠本（2002）のものを筆者がまとめている。
- (7) 楠本では助詞の標示がない名詞句を無助詞句とし、無助詞句が現れている文を無助詞文としている。
- (8) 本稿における関連性理論の考え方は名嶋（2007）を参考にしている。
- (9) 教科書はスリーエーネットワーク編（1998）と小柳昇（2009）を参考にした。
- (10) 以下、両者をまとめて表わす際は「私は／φ」と表記する。
- (11) 無助詞使用の個別的状況に注目した研究に清水（2007）と黒崎（2007）がある。清水は「これ（は／φ）もう～」に、黒崎はニュースの見出しに焦点を当て分析をしている。
- (12) 資料として、宇佐美監修（2005）における『BTSによる多言語話し言葉コーパスー日本語会話1（日本語母語話者同士の会話）』を使用する。「私」とは、資料中の「私・わたし・あたし」「俺・おれ」「僕・ぼく」で表記された3種7通のものである。また、文末に現れた「私」も考察対象としている。
- (13) 以下のすべての用例中の「φ」と、「私は／φ」の下線は筆者による加筆であり、それ以外の話者番号、各種記号、言語外情報の説明は資料のままである。ただし、

用例番号横に会話状況の説明があるものは筆者による。また、下線付きの「私は／φ」を考察対象としている。

(14) 「のだ」の持つ披歴性については田野村（2002）を参考にした。

(15) 本稿では、便宜上、このような「心の動きや思考」を「心理状態」と呼ぶ。

(16) 確認要求については日本語記述文法研究会編（2003）を参考にした。

<参考文献>

- 浅津嘉之（2008）『『私』と無助詞の関係』『日本語教育論集』17、姫路獨協大学大学院言語研究科日本語教育コース、1-8
- 大谷博美（1995）「ハとヲとφ一ヲ格の助詞の省略―「ハとガとφ―ハもガも使えない文―」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』、62-66、287-295、くろしお出版
- 小柳昇（2009）『ニューアプローチ 中級日本語〔基礎編〕改訂版』語文研究社
- 加藤重広（2003）「第5章 ゼロ助詞の機能」『日本語修飾構造の語用論的研究』、331-391、ひつじ書房
- 楠本徹也（2002）「無助詞文における話し手の情意ネットワーク」『日本語教育』115:21-30、日本語教育学会
- 黒崎佐仁子（2007）「話題提示に見られる無助詞文の条件―ニュース見出しを中心として―」『早稲田日本語教育学』、67-80、早稲田大学大学院日本語教育研究科早稲田大学日本語教育研究センター
- 佐藤雄一（2009）「無助詞形式の機能」『共立国際研究』26:19-35、共立女子学園共立女子大学国際学部
- 清水由貴子（2007）『『これ（は／φ）もう～』の無助詞成立の要因について』『ことばの科学』20:5-16、名古屋大学言語文化研究会
- スリーエーネットワーク編（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』スリーエーネットワーク
- 田野村忠温（2002）『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉書院
- 名嶋義直（2007）『日本語研究叢書 19 ノダの意味・機能―関連性理論の観点から―』くろしお出版
- 西山佑司（1999）「1 語用論の基礎概念」大津由紀雄他編『岩波講座言語の科学7 談話と文脈』、1-56、岩波書店
- 日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版
- 長谷川ユリ（1993）「話しことばにおける『無助詞』の機能」『日本語教育』80:158-168、日本語教育学会

<用例資料>

- 宇佐美まゆみ監修（2005）『BTSによる多言語話し言葉コーパス―日本語会話（数字）』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀COEプロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」